

宮で教えをされるイエス

ヨハネ福音書7:14-24
【新改訳2017】

- 7:14 祭りもすでに半ばになったころ、イエスは宮に上って教え始められた。
- 7:15 ユダヤ人たちは驚いて言った。「この人は学んだこともないのに、どうして学問があるのか。」
- 7:16 そこで、イエスは彼らに答えられた。「わたしの教えは、わたしのものではなく、わたしを遣わされた方のものです。」
- 7:17 だれでも神のみこころを行おうとするなら、その人には、この教えが神から出たものなのか、わたしが自分から語っているのかが分かります。
- 7:18 自分から語る人は自分の栄誉を求めます。しかし、自分を遣わされた方の栄誉を求めるとは真実で、その人には不正がありません。
- 7:19 モーセはあなたがたに律法を与えたではありませんか。それなのに、あなたがたはだれも律法を守っていません。あなたがたは、なぜわたしを殺そうとするのですか。」
- 7:20 群衆は答えた。「あなたは悪霊につかれています。だれがあなたを殺そうとしているのか。」
- 7:21 イエスは彼らに答えられた。「わたしが一つのわざを行い、それで、あなたがたはみな驚いています。」
- 7:22 モーセはあなたがたに割礼を与えました。それはモーセからではなく、父祖たちから始まったことです。そして、あなたがたは安息日にも人に割礼を施しています。
- 7:23 モーセの律法を破らないようにと、人は安息日にも割礼を受けるのに、わたしが安息日に人の全身を健やかにしたということ、あなたがたはわたしに腹を立てるのですか。」
- 7:24 うわべで人をさばかないで、正しいさばきを行いなさい。」

【祈りながら考えよう】

- (1)ユダヤ人たちはイエスの教えに、なぜ驚いたのですか。
- (2)その教えが神から出たものか、人から出たものかを判断するには、何が必要ですか。
- (3)主が安息日になされたわざは安息日違反ではないと、どうして言えますか。

【解説】

(1) 主イエスの教えに驚く

仮庵の祭りは7日間続く。祭りの第4日目頃に、イエスはエルサレムの宮の外庭（人々が集会を開くことが認められている回廊の場所／3頁の「エルサレムの神殿」を参照）に上り、教え始められた。

すると、ユダヤ教の指導者たちは、主イエスが彼らの学ぶラビの神学校で学んだこともないのに、どうしてこんなにも通じているのか不思議でならなかった。特に、旧約聖書に対する主の知識の広さ、また教える能力にも驚いたに違いない。それで、「この人は学んだこともないのに、どうして学問があるのか」と言ったわけである。

(2) 4つの答え

ユダヤ人たちの驚きに対して、主イエスは4つの答えをしておられる。

第1は、「わたしの教えは、わたしのものではなく、わたしを遣わされた方のものです。」

主イエスはご自身に功績を帰すことなく、ただ御父に栄光を帰しておられる麗しい姿を見る。その教えはご自身のものではなく、ご自身を「遣わされた方のもの」である、と答えられた。

主が語られること、また教えられることすべては、御父が語り、また教えるように命じられたことであった。主は御父から独立して事を行われることはなかった。

第2は、「だれでも神のみこころを行おうとするなら、その人には、この教えが神から出たものなのか、わたしが自分から語っているのかが分かります」

私たちが何かの教えを聞いた時、それが神からのものかそうでないかを判定することができる人は、「神のみこころを行おうと」する人であるということである。神のみこころを行おうという意志があれば、必ず神からのものであるかどうかを見分けることができるという。

ここで教えられている原理は非常に重要なものである。この箇所から、私たちは、今現在、聖書を通して示されている「神のみこころ」という「光」に誠実に従う時、私たちの心のうちに「さらに多くの光」が上から差ししてくるこ

とに気づかされる。どんなに小さな光であっても、それに謙虚に従うなら、神はじきにもっと多くの光を与えられるであろう。「従順」が「光」をもたらす。

第3は、「自分から語る人は自分の栄誉を求めます。しかし、自分を遣わされた方の栄誉を求めるとは真実で、その人には不正がありません」

自分から語る人、自分の意見や自分の主義主張を語る人は、結局のところ、自分の栄誉を求めている。しかし、主イエスの場合はそうではなかった。主はご自身を遣わされた御父の栄誉を求めておられた。動機が完全に純粋なものであったため、そのメッセージも完全に「真実」であった。主には「不正」というものが全くなかった。

このように形容できるのは、イエスおひとりである。それ以外の人はみな、残念ながら、その奉仕に幾分かの利己心が混ざっている。

私たちの墮落した人間性は、自分の過去や現在の仕事や地位などを誇らしげに示すことで、自らの弱さを包み隠そうとする。自己を高く掲げたいという願望自体、危険信号である。それは、内に何か悪がひそんでいる証拠である。

使徒パウロの書簡を通して流れている基調は、自己を卑下し、キリストの栄光を切に求めることである。「すべての聖徒たちのうちで一番小さな私」（エペソ3:8）、「私は…使徒と呼ばれる価値のない者です」（Iコリント15:9）、「私たちは自分自身を宣べ伝えているのではなく、主なるイエス・キリストを宣べ伝えています。私たち自身は、イエスのためにあなたがたに仕えるしもべなのです。」（IIコリント4:5）とのパウロの模範に倣いたい。

第4は、「モーセはあなたがたに律法を与えたではありませんか。それなのに、あなたがたはだれも律法を守っていません。あなたがたは、なぜわたしを殺そうとするのですか」

さらに主は、ユダヤ人たちを正面から糾弾された。ユダヤ人に「律法」を与えたのは「モーセ」であったことを確認された。この箇所は次のような意味になろう。

「あなたがたはモーセの律法を誇りに思っています。しかし、この律法の心とその精神に心から従っている者は一人もいません。その1つの証拠として、なぜあなたがたはわたしを殺そうとしているのですか。あなたがたはわたしを憎んでおり、第6戒（殺してはならない）をもはばからず、不正にわたしを殺そうとしています。これでは律法を守っているとは言えません。」

(3) 割礼することは安息日でも認められている

主の答えを聞いていた群衆は主の鋭い糾弾にたじろいだ。しかし、おっしゃるとおりです、と認めるのではなく、逆に主に食ってかかった。「あなたは悪霊につかれています。だれがあなたを殺そうとしているのか」と言って、異議を唱えた。群衆一般の人たちは、ユダヤ人の指導者たちがイエスを殺そうとしているなどということは全く知らず、誰かが殺そうとしているなどと言うのはおかしい、悪霊につかれているのではないかと思ったのであろう。

そこで、イエスはベテスダの池のほとりで、38年間も病気で身動きのできない男をいやされたことに話を戻された。そもそもユダヤ人の指導者たちが主に対して憎しみに駆り立てられたきっかけになったのがこの奇跡であり（ヨハネ5:16, 18）、主を殺そうという邪悪な計略に手を染めたのもこの時点でのことであった。

「わたしが一つのわざを行い、それで、あなたがたはみな驚い」たではないか、と主は彼らに想起させた。そして、彼らが主イエスを殺そうとする計画に至った直接の問題である安息日について、彼らの誤りを指摘された。

「モーセはあなたがたに割礼を与えました。それはモーセからではなく、父祖たちから始まったことです。そして、あなたがたは安息日にも人に割礼を施しています。モーセの律法を破らないようにと、人は安息日にも割礼を受けるのに、わたしが安息日に人の全身を健やかにしたということ、あなたがたはわたしに腹を立てるのですか。」

モーセの十戒の第四戒（安息日遵守の規定）によると、安息日には、どんなわざもしてはならないと規定されている。しかし、割礼という儀式は、子どもが生まれて8日目に施すことになっているため、それが安息日に当たっていても、それをするのは違反にならない。ユダヤ教の人々はそのように解釈していた（安息日に禁じられている39の労働について「シャバット18:3、19:1-2」／ユダヤ教の言い伝え）。

この節が問題としている点はこうである。「安息日でも子どもに割礼を施すことは安息日違反にならないとすれば、安息日に「全身を健やかにした」からといって、どうして安息日違反だと非難するのか。わたしは割礼を施して彼の体を傷つけたのではなく、全体を健康にし、強くしてあげたのです。割礼のわざでさえすることが律法で認められているのだから、「あわれみのわざ」を律法が認めるのは道理ではないか。」

(4) うわべで人をさばいてはいけない

エルサレムのユダヤ人たちは、主が安息日にいやしの奇跡を行ったことで、モーセの律法に違反した罪人として告発した。主はこれを受けて、「わたしがした行為をうわべでさばかないように」と言われた。

「確かにわたしは安息日に1つのわざを行いました。しかしそのわざはどんなわざでしたか。必要なわざ、あわれみのわざにほかなりません。あなたがたが安息日に行う割礼同様、律法にかなった行為だったのです。」

表面的には安息日は破られました。しかし安息日本来の意味は全く破られていません。正当で公平な正しいさばきをしなさい。このように内面をよく見ないで性急に行為を非難してはいけません。うわべで人をさばかないで、正しいさばきを行いなさい」との主の叱責をその身に招くこととなった。

エルサレムの神殿

外庭

神殿の丘の周りの回廊には杉材の屋根があった。東の回廊はソロモンの廊と呼ばれていた。この場所では、使徒たちの手によって、多くのしるしと不思議なわざが人々の間で行われた」（使徒5:12）。

異邦人はソレグまでしか行けなかつた。この低い大理石の壁には、異邦人がこの先に進むなら死刑に処せられるという、警告の札が張られていた。この壁はおそらく、もともと神殿の高台の四方を囲んでいた。

イスラエルの民の庭と祭司の庭が低い壁で分けられていた。祭司たちはただけが壁の向こうに行くことができた。祭司の庭には祭壇と、きよめの洗い用の水が入った大きなたらいがあった。

イスラエルの民の庭への入り口は二カノル門だった。これは、二カノルという人が奉獻したコロンの騎でつくられた。立派な門だった。女性はこのことから入ることは許されなかつた。

神殿の建物の脇には、神殿に仕えている祭司たちが養育する部屋が並んでいた。

神殿を見下ろすアントニヤ要塞は、エルサレム駐在のローマ軍の基地だった。ここには500人から600人の、名ばかりの軍が居住しており、現代の軍事基地のようになっている。生活に必要な施設が何でもそろっている小さな町になっていた。ヨセフスによると、「すべての必要の揃った町であり、その壁々たる姿は、宮殿のようであった」。要塞がそこにあるのは偶然ではなかつた。祭りのとき、神殿はトラブルが發生しやすい場所だったからだ。

イスラエルの地は、いけにえの動物を洗う場所として使われていた可能性はある。

ユダヤ人によると、「全然変われなかつた」（ミシュナー・ミドット1:13）タデイ門という北の門があった。人の出入り口としては使われなかつたが、階段が必要でなかつたため、動物を引き入れるための門であつた可能性がある。

婦人の庭には6,000人の礼拝者が入ることができた。ここには男女共に入ることができたが、女性はこの先には行けなかつた。

神殿の丘の東の入り口、シュシヤン門は、ケデロン谷に続いていた。ここに、現在の黄金門がある。

